

# かさだたけだ 笠田竹田遺跡

## 1. 調査の経緯と経過

香川県立笠田高校の校舎等改築事業に関しては、令和2年度より生涯学習・文化財課及び埋蔵文化財センターは原因課である高校教育課と事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を開始し、同事業は、校舎等の既存建物解体後、建築工事を実施する計画であるが、事業予定地内及び隣接地に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在していないことから、一先ず解体工事に伴い工事立会を実施し、包蔵状況を確認することで合意した。

令和2年9月には、プール施設解体に伴う工事立会において、埋蔵文化財の包蔵を確認し、「笠田竹田遺跡」として周知されたため、同年11月には校舎棟建設予定地に含まれる既存建物間の前庭部等において試掘調査を実施した結果、地下遺構・遺物の包蔵を確認し、510㎡の本発掘調査が必要と判断された。

その後、工事計画と事業予定地内の埋蔵文化財の取扱い協議、調整を重ねた結果、令和3年6月に本発掘調査を実施する運びとなった。本発掘調査は、同年6月1日に開始し、天候にも恵まれて現地作業が順調に推移し、6月30日に現地を撤収した。

また、本発掘調査に合わせて同年6月及び9月、自転車置き場等の建設予定地の試掘調査を実施し、地下遺構の包蔵状況の確認を行ったが、遺構・遺物は確認されなかったため、同事業実施に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協議を終了している。

## 2. 遺跡の位置

笠田竹田遺跡は、香川県西部に広がる三豊平野の中央部の標高17m付近の洪積台地上に立地している。周辺の遺跡は、弥生時代以前は不明確な点が多く残るが、古墳時代中期には遺跡西側約2kmの七宝山東麓に初期須恵器窯である宮山窯跡が、同東側約1kmには周溝を備えた直径約30mの円墳である大塚古墳が存在する。古代には遺跡より東へ約300mの位置に駅路である南海道推定ラインが南北に貫け、妙音寺跡や道音寺跡などの飛鳥時代後半から奈良時代初頭の古代寺院が存在している地域である。



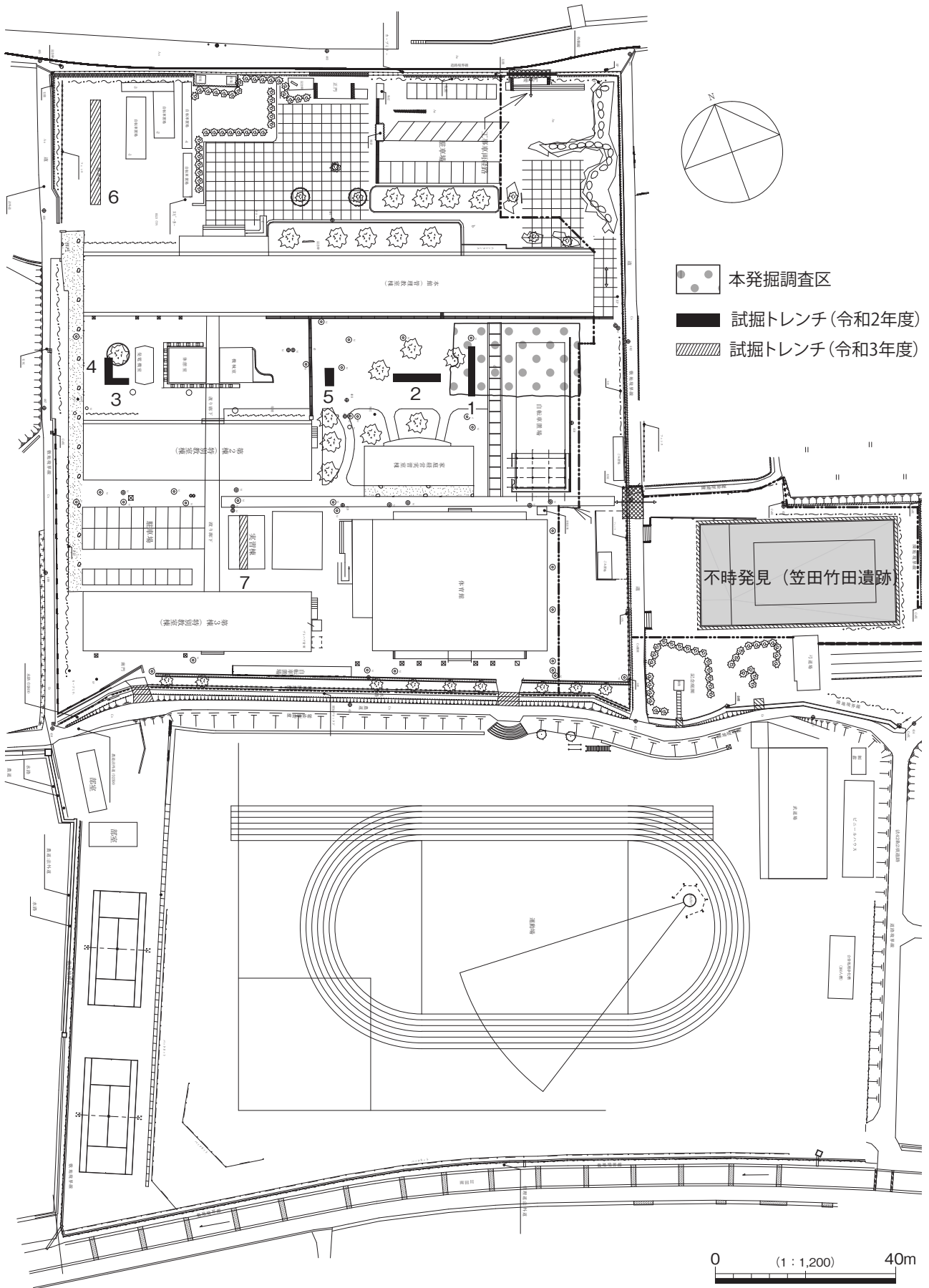
第7図 遺跡位置図 (1/25,000)

## 3. 調査の成果

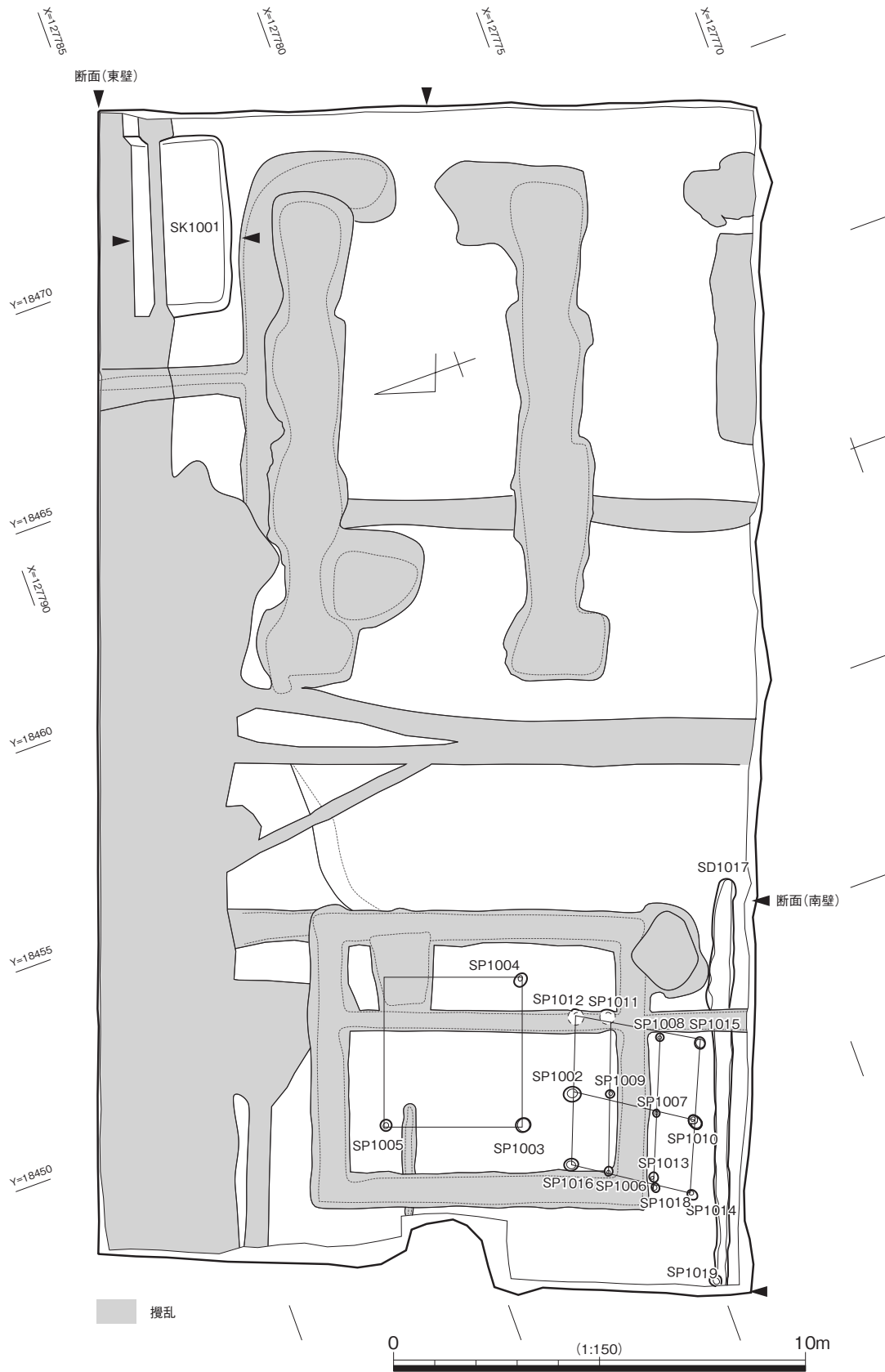
### (1) 層序

着手前は、調査区西半部が前庭、東半部が自転車置き場として利用されていた。地表面下は既存建物及び校庭等の建設に伴う造成土がみられ、その下面が遺構検出面の黄灰色粘土の基盤層となる。基盤層上面に遺物包含層が一切介在しない状況からみて、遺構検出面は極度の削平を受けていると考えられる。

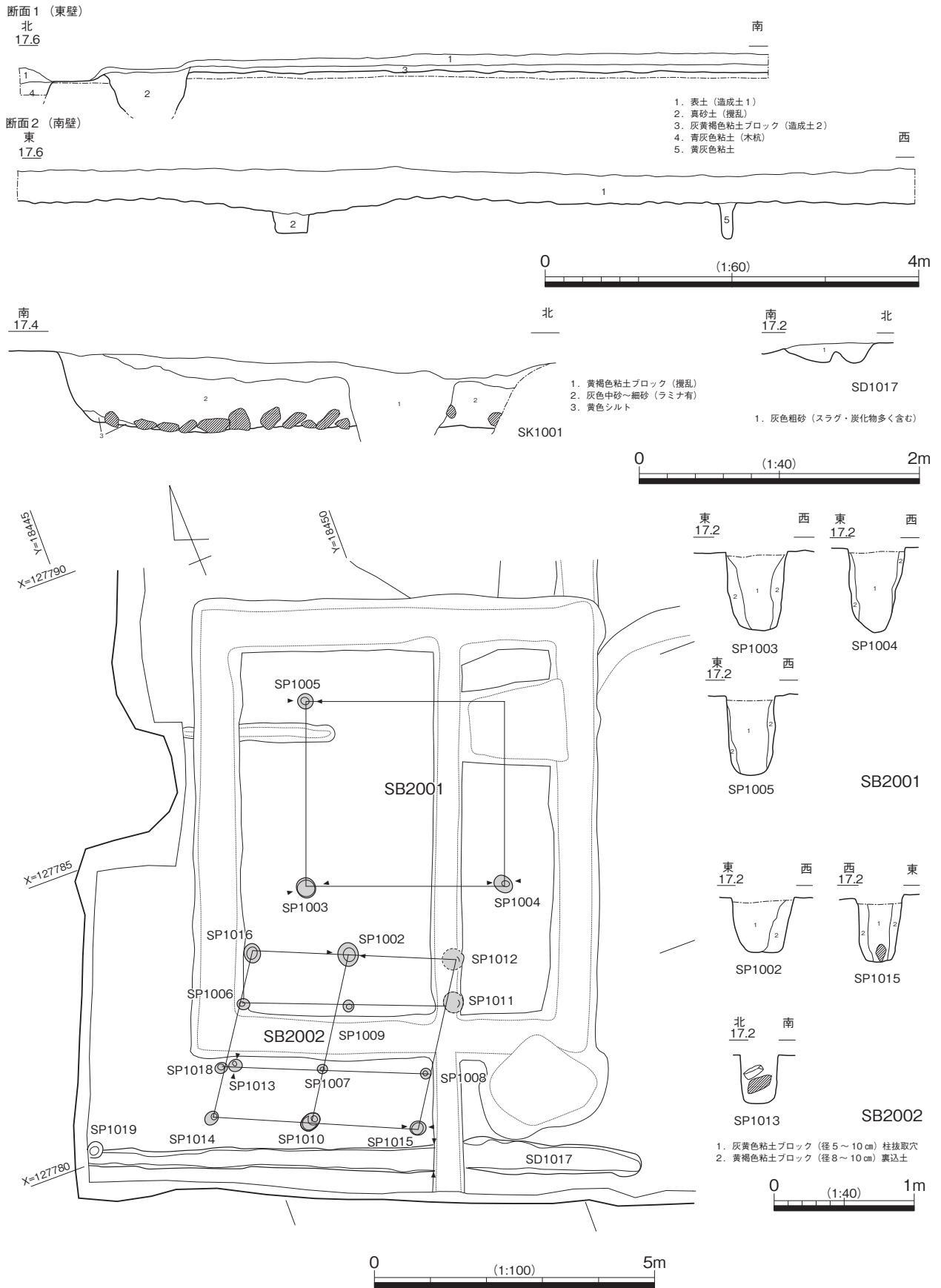
また、調査区内の各所において、造成土中より掘り込まれる既存建物の基礎とみられる攪乱を多く検出するなど、遺構検出面の遺存状態は不良と言わざるを得ない。



第8図 調査区配置図 (1/1,200)



第9図 遺構配置図 (1/150)



第10図 壁断面及びSB2001・2002平・断面図 (1/100, 1/60, 1/40)

## (2) 検出された遺構・遺物

### 1) 古墳時代以前

調査区南西部において柱穴群を検出し、その配置状況から2棟の建物を復元できる。

SB2001は、直径約0.3mの円形を呈する柱穴3基（SP1003～1005）が直角に配置されるもので、北東部は攪乱坑によって消失したものとして、1間×1間の建物として復元した。柱間からみて、竪穴建物の残欠である可能性が高く、一辺が5～6mの方形プランを推定できる。柱穴の残存深度は0.35～0.6mを測り、柱材は全て抜き取られ、壁際には裏込土とみられる黄褐色粘土ブロックが辛うじて残存している。遺物はSP1003より土器細片の出土をみたが、詳細な時期比定は困難である。

基盤層の黄灰色粘土を起源とする埋土をもつことや竪穴建物と推定されることからみて、概ね古墳時代以前と推定しておく。

SB2002は、梁行2間(3.6m)、桁行3間(3m)の小型の総柱建物である。平面形がやや歪みをみせるが、同様の歪みは小型の総柱建物においてしばしば確認されることや、共通した埋土をもつ柱穴がまとまって検出されている状況を評価して建物として復元したものである。柱穴の残存深度は、側柱（SP1002、1013等）で約0.4～0.5m、束柱（SP1007、1009）で約0.2mを測り、柱材は全て抜き取られている。遺物は、柱抜取に際して砂岩礫が投棄されたSP1013から土器細片の出土をみたが、詳細な時期比定は困難である。埋土がSB2001と同様に基盤層起源のブロック土をもつことからみて、同様に古墳時代以前の遺構として推定しておきたい。

### 2) 近代

当該期の遺構は、調査区南西部のSD1017、同北東部のSK1001が挙げられる。

SD1017は、上面幅約0.6m、残存深度約0.15mを測る東西方向の溝であり、底面は凹凸が著しい。埋土は灰色粗砂の単一層であり、土管や成因不明のスラグが出土している。

SK1001は、北側を現校舎棟建設に伴う攪乱によって消失する方形土坑であり、東西方向では2.9mを測る。断面形状は逆台形であり、底面には砂岩礫が敷き詰められていた。出土遺物は、土管片に交じって5円硬貨（昭和24年鑄）が出土している。砂岩礫の性格は不明であるが、出土遺物からみて、昭和3年に香川県立三豊農業学校として創立された初期の笠田高校に伴う遺構と考えられる。

### 4. まとめ

小規模な調査であったが、古墳時代以前の集落を構成するみられる建物2棟（SB2001、2002）を検出するなど、当該期の調査事例が少ない三豊平野において貴重な資料が得られており、本遺跡周辺における今後の発掘調査の進展が期待される。



写真 15 調査区東部全景（北西から）



写真 16 調査区西部全景（北から）



写真 17 SB2001・2002 全景（南から）